

# アブ・ジハドの暗殺とシオニストの危機

一九八八年五月一〇日

暗殺 蜂起の発端アフ・シハド

指導部は、前号の資料で紹介したアーピール一三号を発し、蜂起のさらな

シオニストはパレスチナ人民蜂起に対し、なりふり構わぬ攻撃を開始した。その一つがアブ・ジハドの暗殺であり、もう一つは、南部レバノンに対する再侵略の開始である。これはシオニストの危機の深さを示すものであると同時に、まさに、パレスチナ人民の抹殺によってしかその存在を維持しえないシオニストの本質を示すものである。他方、パレスチナ人民の不屈の闘いは、中東の

一 蜂起の發展とアフ・ジバトの  
暗殺

指導部は、前号の資料で紹介したたる  
ピール一三号を発し、蜂起のさらなる  
發展を呼びかけた。とくに四月一  
七日からのラマダン（断食月）の開  
始のなかでも蜂起が發展させられる  
よう、人民に自力の食糧の生産の  
強化によって、生産が停滞し、消費  
が拡大するラマダンにそなえを呼び  
かけた。また、シオニスト占領軍に  
よる火炎びんに対しての実弾発砲の  
許可に対する抗議の日として四月二

火炎びんでのショニストへの攻撃を  
呼びかけた。商店に対しては、ラマダンの期間中、これまで早朝のみの開店時間を、午後のみとして、ラマダンでの人民の生活が維持できるように指示を出した。

アブ・ジ・アブ・ジ・蜂起の背景  
5・30 声 日本赤軍 激動の中 編集後記 東京後記

## 目 次

アブ・ジハドの暗殺とシオニストの危機	1
アブ・ジハドは勇気を遺す（資料①）	8
蜂起の背景（資料②）	10
5・30声明（資料③）	15
日本赤軍声明（資料④）	17
激動の中東ドキュメント重要日誌（1988年4月11日～5月7日）	19
編集後記	20
東京後記	20



第 35 号

ウニタ書舗

東京都

TEL. (03) 291-55

編集 J. R. A.

郵便振替 東京1-484

米国 NBC の記者は記者証を奪われ取材を実質的に禁止されてしまった。これらのことからチュニジア当局の捜査結果を待たなくともその下手人は明らかであった。シオニストを擁護する帝国主義者の中ではひとりイタリアだけがシオニストを名差し非難した。國際世論は、シオニスト、米帝の態度に怒りを集中させた。

パレスチナ革命は、PLO とシリアルアの関係改善の成果として八二年以来六年ぶりに南部レバノンのアルクレープ、通称フタタ・ランドからの占領地内への作戦を行った。四月二十六日には DFLP のアブ・ジハド部隊が実行し、シオニスト兵二名を殲滅した。翌日には PFLP とレバノン共産党の共同部隊が同じアルクレープからの占領地内への攻撃を行った。

アブ・ジハドの暗殺で蜂起を解体することに失敗したシオニストは、シオニストは、二七日には一五〇人の部隊、戦車などの機甲化部隊、へ

リコプター、戦闘機を動員して、本格的な侵略を開始し、アルクレープのアイン・アタ、リバッヤ、ミメス、クファイルの四つの村に侵攻した。また、同時にいわゆるセキュリティ・ゾーン内の四つの村を襲った。シリア軍はシオニストの侵略の拡大に備えてフル・アラートの体制に入った。また、他方では、パレスチナ革命とレバノン民族主義運動の拠点である南部レバノンの港町サイダ近郊にもかいらい SLA が砲撃を加え、シオニスト軍は、シリア国境から一〇キロ、ベカヤに駐屯するシリア軍から一七キロの地点にまでせまつた。

シオニストは、二日間の戦闘で四〇人の村民を含むレバノン人を殺し、村を完全に破壊し、ブルドーザーで一つ残らず家屋を破壊しつくした。同時にヒズボッラーの抵抗で、二名のシオニストをせん滅し、二〇人以上を負傷させている。この侵略は八二年のシオニストの侵略を想起させるものであり、その時と同様にシリア軍との交戦の意思のないこと、限定的なものであることを繰り返し宣伝した。

シオニストはこの作戦の目的をレバノン南部への侵略を行うことによつて、シオニストに不利となつた情勢を変えようとして、また、被占領地への弾圧をいつそ強化した。

シオニストは、二七日には一五〇人の部隊をいわゆるセキュリティ・ゾーンを越えてレバノン侵略を行つた。続く五月二日には二五〇〇人の部隊、戦車などの機甲化部隊、へ

リコプター、戦闘機を動員して、本格的な侵略を開始し、アルクレープのアイン・アタ、リバッヤ、ミメス、クファイルの四つの村に侵攻した。また、同時にいわゆるセキュリティ・ゾーン内の四つの村を襲った。シリア軍はシオニストの大規模作戦の前哨戦として考えられている。また、シオニストは彼を抹殺すれば蜂起はおさまると考えていたのである。それは、

バノン南部の村民に対して『メッセージ』を伝えることにはじめたと説明している。すなわち、彼らの『メッセージ』とは砲撃を村に行い、銃口で石と火炎びんによる抵抗闘争を始めた。同時に、強化することを呼びかけている。また、それ以前には、シオニストへの軍事的、経済的なテコ入れを行つていている。それはシオニストが大規模軍事作戦を可能とさせる。これらのシオニストの攻勢に対し、蜂起民族統一指導部はアピール一五号を四月二九日に発し、次の七日間を怒りの週とするこれを被占領地の全パレスチナ人民に呼びかけた。このアピールのなかでラマラ、アルビレ、ジェリコ、ヘブロンのシオニストによって任命されている市長に対して辞任を呼びかけた。そして、

バノン南部の村民に対して『メッセージ』を伝えることにはじめたと説明している。すなわち、彼らの『メッセージ』とは砲撃を村に行い、銃口で石と火炎びんによる抵抗闘争を始めた。同時に、強化することを呼びかけている。また、それ以前には、シオニストへの軍事的、経済的なテコ入れを行つていている。それはシオニストが大規模軍事作戦を可能とさせる。これらのシオニストの攻勢に対し、蜂起民族統一指導部はアピール一五号を四月二九日に発し、次の七日間を怒りの週とするこれを被占領地の全パレスチナ人民に呼びかけた。このアピールのなかでラマラ、アルビレ、ジェリコ、ヘブロンのシオニストと関係があるとして逮捕され、弁護士との接見も許されていない。また、非暴力主義者のパレスチナ系国人ムバラク・アワードに対しても国外退去を命じた。これらの連の弾圧の特徴はパレスチナ人とイスラエル人の平和的な対話による共存をもとめる「稳健派」をも「テロリスト」として弾圧していること

トは、土地の日を被占領地全体に対する厳戒体制と外界からの孤立化と徹底した虐殺と弾圧で押さえようとしたが、その試みが破綻したことが明確になつていて。シオニストは、四月一日にガザ、西岸の活動家八人を國際世論の非難を無視して、レバノンに追放した。また、蜂起を嚴戒体制によつても解体しきれなかつたシオニストはパレスチナ最高指導者の一人を暗殺することに、蜂起解体の望みをかけた。

四月六日、イスラエルのテロ組織モサドの部隊がチュニスのアブ・ジハドの自宅を攻撃し、彼の護衛三人とともに、アブ・ジハドを射殺した。これは、一九七三年のペイルート市内ベルダン地区でのパレスチナ革命の指導者暗殺の十六周年にあたり、それとまったく同一のテロを行つていて。シオニストは、蜂起の鎮圧のためにパレスチナ人の最高指導者の一人を暗殺することを政府レベルで決定していた。殉教者同志ハリール・ワジール（アブ・ジハド）は、被占領地の蜂起の最高指導者であつたし、その蜂起の発展に果たした役割は大きなものであった。シオニストは彼を抹殺すれば蜂起はおさまると考えていたのである。それは、

この厳戒体制下で、一日の虐殺では蜂起開始以来最悪となり、実に二人以上以上のパレスチナ人が殺された。この殉教者の数は、シオニストとパレスチナ人民の衝突がどれだけ激しかつたかを物語っている。また、同時に、これはパレスチナ人民の怒りの深さと戦意の高さを示すものであった。

それだけにとどまらず、このシオニストのテロは対立関係が続いている PLO とシリアの関係を改善させた。この関係の改善は、被占領地人民が要求していたものであり、これによって、被占領地のパレスチナ人たちは PLO の政治部長ファルーク・ハドウミ、また、ヨルダン、アルジェリースアラブ社会党の指導者、そして、PLO の政治部長ファルーク・ハドウミ、また、ヨルダン、アルジェリースアラブ社会党の代表とインティファーダ（アブ・ムサ派）を除くすべてのパレスチナ組織が参加した。昨年のアルジェでの PNC の統一大会以降も、PLO に復帰しなかつた救済戦線の組織との再統一の条件がここにできあがつた。もちろん、

父母の要請に基づいて、PLO 葬儀をヤルムーク難民キャンプで行うことを承認したことによつてもたらされた。葬儀にはアラファト議長は参加しなかつたものの、葬儀の四日後の四月二十四日にはアラファト議長が五年ぶりにシリアを訪問し、シリアのアサド大統領と会談することになった。このシリアと PLO の関係の改善は、シオニストの危機感をさらに深めさせることになった。これはアラバランなどのアラブ反動がシリア、PLO の力で、おさえられるようになってしまった。これは、明確にシオニストの誤算であった。

アブ・ジハドの葬儀はヤルムーク・キャンプでシリア政権党であるバースアラブ社会党の指導者、そして、PLO の政治部長ファルーク・ハドウミ、また、ヨルダン、アルジェリースアラブ社会党の代表とインティファーダ（アブ・ムサ派）を除くすべてのパレスチナ組織が参加した。昨年のアルジェでの PNC の統一大会以降も、PLO に復帰しなかつた救済戦線の組織との再統一の条件がここにできあがつた。もちろん、シオニストの被占領地内の弾圧は止まるることを知らない。アブ・ジハドの暗殺のあとさらに八人のベイタ村の活動家を南部レバノンに追放した。これはベイタ村でのシオニストのセツラーラによるセツラーラの少女の射殺をパレスチナ人の責任に転嫁して、弾圧を行つたものである。また、先月につづいて五月に入つて東エルサレムのアラビア語・英語週刊誌「アルーウダ」閉鎖を命じた。その前の週には、「デレカ・ハニツオズ」のイスラエル人の女性編集者が DFLP と関係があるとして逮捕され、弁護士との接見も許されていない。また、非暴力主義者のパレスチナ系国人ムバラク・アワードに対しても国外退去を命じた。これらの連の弾圧の特徴はパレスチナ人とイスラエル人の平和的な対話による共存をもとめる「稳健派」をも「テロリスト」として弾圧していること

る。反対に労働党に対する支持は一月には四六%あったものが四月には三八%に低下した。これは明確にイスラエルの世論がシャミルの立場に同調はじめたことを示している。ペレスのシャミルに対する対決姿勢が四月以降弱くなっているのはこのためである。また、極右シオニストのセツラーによるパレスチナ人民に対する攻撃の増大も同一のことを根拠にしている。ベイタ村での衝突でセツラーの少女がシオニストの銃弾で死んだ事件はその典型といえる。これは、シオニスト占領軍の捜査報告でも明らかになつてゐるようく、軍が禁止しているにもかかわらず、極右シオニストが衝突を挑発するためにハイキングを行い、パレスチナ人の投石を口実にM-16突撃銃を乱射しパレスチナ人二人を殺してゐる事件はこのとき乱射を行つていてシオニストに石が命中し、混乱したシオニストが誤ってセツラーの少女を殺したのである。極右シオニストはこれをパレスチナ人が殺したと言ふくるめることによつて、パレスチナ人への軍の強硬な弾圧を導こうとした。シオニスト占領軍はこの要求にも答え、ベイタ村に活動家を逮捕

したにとどまらず、レハノンへ追放し、また、ベイタ村のパレスチナ人の家を破壊した。

このシオニスト内の世論動向の変化は、シオニストの経済的、社会的危機にも根ざしている。経済危機は八二年のレバノン侵略によつて、完全に破綻した状態にあり、米帝の経済援助によつてその存在が維持されているといつても過言でない状態にあり、パレスチナ人ではなく、イスラエル人自身による労働争議が続いた。そこにきて蜂起によるパレスチナ人のイスラエル製品のボイコット、イスラエルのもとでの労働の拒否は、イスラエルの経済に決定的打撃を与えた。また、ECのイスラエル農産物の協定の批准の延期があつた。被占領地からの直接の欧州への輸出拒否に対する欧州側からの対応であった。加えて米帝の経済危機による援助額の低下は、いっそう深刻なものとしてある。

また、社会的には前号でも述べたように、モラル低下と社会的影響が問題になつてきたのと、さらに五ヶ月間の蜂起の長期化は、イスラエル軍を予備役まで動員せざるをえない状態においており、動員の長期化もまた問題となつてきた。

このような状況を背景として、イスラエル内の危機意識が高まっている。この危機感が深い分、へたをするよりアラブを有利にしかねないペレスよりも強硬なシャミルによつて、力強くで解決することを望むようになつたこと。それがシオニストがテロによる攻勢にててくる根拠としてあると考えられる。

これがアブ・ジハドの暗殺に踏み切らせる根拠となつてゐる。シオニストの政府レベルでの暗殺の検討は蜂起の開始の時点から始まつてゐる。そして、アブ・ジハドに対象を決定したのは彼がPLOの被占領地政策の最高責任者であり、現在の被占領地内の指導部を指導する位置にあることである。それによつて、蜂起の解体を図ることができると考えたのである。

これが誤算であつた。シャミルが暗殺後「数週間内に蜂起が終わる」と言ったことと反対の現象が現われたのである。すでに述べたように、被占領地内パレスチナ人民の怒りを高め、蜂起は終わるどころか拡大することになつた。そして、PLOとシリアルの和解である。

シオニストはおそらくPLOとシリアルの和解が困難と見ていたにちが

暗殺を実行することの決定ができたのである。P L O とシリアの和解は第一には、中東における進歩勢力の統一をつくりだし、アラブ反動とりわけヨルダン反動が直接交渉への道を開くにい条件をつくりだしたこと。これまでヨルダンは、シリアと P L O の対立を利用し、その間のバランスをとりながら直接交渉への道を開こうとしていた。第二に、P L O の完全な再統一の条件ができたこと。昨年のアルジェでの P N C 統一大会においても救国戦線を形成していたパレスチナ組織との統一は達成されていなかつたが、シリアと P L O との和解はその条件をつくった。第三には、シリアと P L O の和解はレバノン国境からの被占領パレスチナへの武装闘争の強化を意味する。第四に、被占領地のパレスチナ人民の闘いを鼓舞し、物質的にも強化することになる。とくにこの蜂起自身がアラブ民族主義の反動的傾向が増大したものであること。まさにその闘いの成果として、この和解がある。これがシオニストに脅威を与えた

パレスチナ人民蜂起が人民委員会を生み出し、パレスチナ人民の自己権力の実体をつくりあげつあることを前号で伝えたが、新たな発展として、独自の教育システムをつくりあげていることが報告されている。西岸では二月以来、八〇〇の学校、五つの大学、一〇の單科大学が閉鎖され、シオニストによって、収容所にするために接收されるなど、パレスチナの子供たちの教育を受ける権利をシオニストは否定してきた。これに対してパレスチナ人民は教会、モスク、個人の家や裏庭を学校として、ボランティアによつて、子供たちの教育が続けられている。これはパレスチナ人民の民族自決とパレスチナ民主国家の基盤の形成として意識的なものとしてつくられている。

このように、シオニストがいくら力で弾圧しようともそれに打ち勝つ人民の力がすでに形成されており、在外での団結の回復と併せて、パレスチナ人民蜂起をさらに発展させる条件が生まれている。

シオニスト内部では、テロリスト・シャミルの訪米と前後して、極右シオニストが総体として力を拡大し、いわゆるランド・フォー・ピースを唱える勢力が後退した。シオニストは一坪たりともアラブ領土を返還する意思のないことを明確にした。シャミルが折衷的なシユルツの和平案に反対したのは、第一に、それが暫定自治の期間を三年間にしているからである。これは、キャンプ・デービッド合意においては五年間とされていたもので、その短縮に反対している。キャンプ・デービッドの時点でも明らかなことであつたが、暫定期間にセツルメントを拡大し、パレスチナ人を追い出し、ユダヤ人の人口を多数派にすることによって、占領地の「住民」の自主的決定によつて併合する意図を持っていた。それが三年間に短縮されることはこれを困難にするからである。また、国際和平会議に反対するのは、会議に他の大国が入ることで「イスラエル」優位の状況を変更させられるからで

これに対してもペレスに代表される「ランド・フォード・ピース」をとなえる部分は、現在の「イスラエル」の経済的、政治的、軍事的な困難を克服するために、一時的平和が必要であるという考えに立ち、土地の一部をアラブに返還することによって、「平和」を求める立場にある。彼らはシャミルの立場を、强硬に領土の返還を拒否することによって、現在の危機の解決を困難にするものと考えている。しかし、共通しているのはシオニストの立場であり、土地がアラブのものがあるので返還するということではない。これはあくまでシオニストの現在の危機を脱するための一時的な平和を求めているだけである。したがって、パレスチナ人の独立国家の建設に反対であること、パレスチナ人民の唯一合法代表であるPLOを認めないことでは同じである。これを承認すれば被占領地の主権を認めることになり、また、パ

「テロリスト」として排除し、アラブ反動とシオニストの軍事的優位に基づいて交渉し、「和平」—アラブを屈伏させることを目的としていることは同一である。

パレスチナ人民蜂起の持久的な展開は、こうした論議に転換をもたらしてきました。蜂起に示されているのは、パレスチナ人民の力の強さであり、シオニストが理解したことは、この強さを容認して交渉すれば、シオニストの立場が弱くなることである。それ以上に、この力のなかにシオニストの存在を根本的に否定する力が存在していることである。それゆえにシオニストは危機感を深め、蜂起の解体なしにはなんらの交渉を持つことはできないと考えているのである。そして、シオニストは、シャルルの強硬路線を選択しはじめているのである。

イスラエルの日刊紙「マアリブ」によると今年一月にはリクード・ブルックへの支持は三三%であったが、四月の調査では、三九%に伸びてい

である。

これは、明らかにシオニストがパレスチナ人との対話を望まず、彼らは銃と警棒による対話のみを望んでいることを示している。パレスチナ人民蜂起が人民委員会である。

二 シオニストの危機と冒険主義  
シオニストは、五ヶ月に渡る蜂起に対して、力で解決する道を選んだ。アブ・ジハドの暗殺はその明確な現われとしてあつた。

シオニスト内部では、テロリスト

ある。それはシオニストが妥協させられることを意味し、受け入れることはできないのである。シオニストにとっては、西岸、ガザも神から約束された土地であり、彼らの思想からそれを返すことはありえないこと

レスチナ・アラブ人民の土地を奪つて作り上げた国家であるがゆえにその存在の根本にかかわることになるからである。

したがつて双方にPLOの存在を「テロリスト」として排除し、アラ

大統領選を前にして、失策続きと政権内にいた旧スタッフからの暴露の続出で、その挽回が必要とされるレーガン政権にとって、シオニストへの支援を強化することによって、米国シオニストを引きつけることは重要なことになつてゐる。

そして、政権の華々しい成果をつくりだすためには、なんらかの派手な行動が必要であった。ソ米の INF 削減条約の締結と軍縮の進展は、その一つとして数えられていたが、議会がその履行の検証の問題で疑問を出し、批准を拒否している現状では切り札になりえず、なんらかの行動を必要としていた。米帝が考えられることは、ガルフ戦争で、イランを痛めつけることであり、また、シオニストの立場を強化することであつた。イランに対しても、四月一八日誰がしかけたものかも分からぬ機雷での米国戦艦の被害を口実にしてイランのオイル・プラットホーム、艦艇への攻撃を加えた。しかし、イランとの戦争への深入りは、ペトナムの再来にもなりかねず避けた。残るは、シオニストに行動を起こさせることである。すでに見てきたようにシオニストもなんらかの行動を起すことを行つており、それに

四 シリアとPLOの関係の改善

とレバノン問題

見あうものは、レバノンへのシオニストの侵略である。これによつて、米帝は多くの利益を得ることができるのである。シオニストを侵攻させることによって、レバノンでのシリアと親米勢力の力関係を変えることであり、それによつて、シリアの影響力を低下させ、蜂起によつて、困難になつてゐたイスラエルとアラブの統合支配へと再び進めることがある。これは、米帝が手を汚さず、成果を手にいれることができる点で最も米帝にとって望ましいものである。

米帝が五月二日にシオニストのレバノン侵略に対しても示した態度はそれを示している。また、それはシオニストが八二年に近い規模での侵略を行う可能性がある根拠でもある。

が双方の代表者によつて、詰められてゐる段階である。

アラファート、アサド会談の実現自身が、さまざまな相違点があるにもかかわらず、その戦略同盟の再開への重要なステップとしてあつた。PLOにとつては、アラファート議長の追放以来のさまざまな問題を解決し被占領地の蜂起の強化とレバノンからの一武装闘争の強化を意味していた。そして、アラブ反動がPLOぬきにシオニストとの取引に流れることに対する強力な牽制となることである。シリア側にとつては、シリアの政治的な立場を強めるることは一つの要因であるが、PLOの関係の根本的問題はレバノン問題にあり、そこでの利益を考えていると思われる。言われていることは、米帝との協調によるレバノン安定化が失敗し、PLOを味方につけることによって、対右翼キリスト教徒勢力、シオニスト、米帝に対するバランスをつくる必要性から、PLOとの和解を認めたということである。これまでの問題はPLOのレバノンでの力の拡大がシリアルの影響力を低下させ、安定化の妨げになるところえPLOの力を限定的なものにしようとしてきたこと

との関係はイランの進出をおさえ、

シリアのレバノンでの位置を保持し

であり、それが矛盾となってきた。シリアがレバノン問題での立場を変更する根拠としては、PLOがアマル以外のレバノン民族運動に対しての影響力を持つており、レバノン大統領選を控えて、力関係を有利にすることにあつたのではないかと考えられる。また、もうひとつ要素は、ヒズボッラーの力の拡大、すなわち、イランの力の拡大をおさえることがアマルの力でできなくなっていることである。

イランとシリアは同盟関係にあるが同時に、イランがレバノンで影響力を拡大することは、シリア自身にとって脅威になる。この脈絡でみればシオニストのレバノン侵略の直後に始まつたアマルとヒズボッラーの大規模な戦闘が理解できる。PLOとの関係はイランの進出をおさえ、シリアのレバノンでの位置を保持しシオニスト、米帝との力の均衡をつくりだすためにあるだろう。

エジプトの問題では、PLOとエジプトの関係は歴史的に深いものがあり、たんに政治関係にとどまるものではなく、PLOの側がそれを切ることは困難な問題としてある。エジプトは、PLOとシリアの関係の改善によって、PLOとの関係を切

現在のシオニストの戦術の目標の中心は、シリアとPLOの統一の破壊にあることは明らかである。なぜならレバノン問題がシリアとPLOの関係のアキレス腱であり、政治問題での対立よりも深刻なものがあることを知つており、レバノン問題を全面化させることができることで統一を破壊する最も容易な方法であった。すなわち、パレスチナ革命のレバノンからの闘争を口実にして、シリア軍との力関係にまで影響を与える報復を行うことによって、シリアがPLOをおさえざるをえない状況をつくりだし、矛盾を激化させることである。また、同時にこれは九月にせまるレバノン大統領選挙へのシオニストの影響を強めることでもある。八二年のときも同様に、レバノン大統領選挙の時

シリアが制空権を奪われた後停戦したことでシオニストに対しても最後まで鬭わなかつたとして、不信の関係をつくることになった。

現在のシオニストの出口のない状況のなかで、八二年のような侵略を開始する可能性が高まっている。しくに連立政権と言いつつもシャミルのリクードの力が拡大し、その冒險主義の生み出す条件は整いつつある。その目標におかれるのは、レバノンの力関係の転換とシリアとPLOの矛盾をつくりだすことである。

次に米帝とシオニストとの関係を

口】法をPLOの国連代表部に對して適用するという前代未聞のことを行つてゐる。

また、この蜂起のなかでも米帝とシオニストの戦略同盟關係は強化されている。今月にはいっても米帝はイスラエルに対して最新の防空システムを供与するなど、シオニストを軍事的に強化している。また、経済面でも、一昨年来中東マーシャル・プランが提起されていたことに見られるように、米帝の負担能力の低下を日本、西ドイツなどに肩代わりさせることによつて、その經濟破綻を食い止めようとしている。とくに日本は昨年来各種の代表をおくり、伝統的な石油外交を捨て、米帝に共通し、帝国主義の橋は頭であるイスラエルの防衛に力を貸しはじめている。これは東アジアにおけるフィリピン

統領選挙を背景として強化されてい  
る。米国のシオニストは徹底してシ  
オニスト支持の立場にたつ民主党の  
デュカキスを支持し、レーガン政権  
にゆさぶりをかけている。レーガン  
大統領の後継者であるブッシュ副大  
統領は、共和党では指名第一位にな  
ったが、大統領選総体では、ユダヤ  
票をデュカキスに奪われている。レ  
トガノン政権は、これを取り戻すため  
に、シオニスト支援を強化する必要  
があつた。この米国シオニストの力  
の大きさは、議会のコントロールに  
とどまらない。親パレスチナで知ら  
れていた民主党のジャクソン候補ま  
でが、「シオニストからさんざん「ア  
ンチ・セミツム」という御門違い  
の批判を受けて動搖し、「アラブア  
ト議長とは会わない」と言って、ア

な占領に対する人民の反応である。また、そうした性格のものとして、国際世論を味方につけてもいる。世界の人々が、毎日、毎日、イスラエルの残酷さを目撃したりしてきた。二八〇人のパレスチナ人が殺されたこと、パレスチナ人がどう反応しているか、これが、世界中の人々の良心をゆり動かし、世界のイスラエルに対する見方を左右した。が、今、必要なのは、領内の闘争の現実にみあつた領外での政治的対応である。問…しかし、行動予定、戦略はありますか？

答…世界にそして関連機関に被占領地内の情況をはつきり知らせて、道義的、理論的な理解以上の一歩を含め、PLOは、独自の詳細な行動計画を作つてある。

問…先刻二八〇人の「殉教者」と言われましたね。世界のマスコミは、一四〇人としか報道していません。犠牲者リストがありますか？

答…一四〇人とは、イスラエルの発表した数字である。我々には、どこで、いつ、何歳の誰が倒れたかの情報がある。

（領外）追放について

問…さらに八人が追放されています。これ以上、追放をさせないために、何か案がありますか？

答…追放によって蜂起を弱体化、もしくは、完全に抹殺できるとイスラエルは考へているが、それは誤っている。逆に、追放すれば、それだけ蜂起が燃え上がる。追放すればするほど（追放は、イスラエルの（占領）システムの症候だ）、レジスタンスが鍛えられて、力を増すことになる。イスラエルは、パレスチナ全員を追放することはできない。たとえ、ほんの少しのパレスチナ人しか被占領地に残らないほど追放しつくしたとしても、パレスチナ人の闘争は続いている。しかし、イスラエルの追放を止めさせるための国際的努力がすべて効を奏さないという場合は、イスラエルの政策を変えざるを得ない。PLOは違う方法をとるだろう。

問…総体として、PLOの目的はどうありますか？ 国際会議を通じて、独立パレスチナ建国ですか、それとも。

答…PLOは、パレスチナ人民の要求を反映している。パレスチナ人は、他のどの人民よりも長く解放闘争を闘っている。英委任統治以

来、バルフォア定着と「人の住んでいない土地を国を持たぬ人々に」という概念がうち出されてからというもの、パレスチナ人民は、その概念の嘘をあばき、パレスチナ人民がパレスチナの土地と歴史に深く根をおろしてきたのだという事実を世界に理解させるよう、闘争を続けて、今日に到つてゐる。当時、陰謀の力關係が、我々に圧倒的に不利であったため、我々は、国をとられた。パレスチナの民族的な土地の一部に残つた人々も、六七年戦争で、イスラエルの占領支配をうけることになった。こうして、パレスチナ人は、全員が、イスラエルの占領下にくみこまれ、イスラエルは、他の人民が享受している基本的権利すらも、パレスチナ人に認めなかつた。

パレスチナ人民は、何を目的に闘つているのか？ 一つのことのため、パレスチナ国家の建設である。そのパレスチナ国で、我々は死んだ人々を葬つてやれるし、イスラエルの攻撃をうけることなく誇り高い旗を掲げることができるし、自分たち自身のパスポーツで自由に往来ができる。

問…パレスチナ・ヨルダン合同代表団の一部としてその国際会議に参加するには、すべての自由な人民のよう

らないことを明らかにしている。しかし、エジプトとの関係の問題では、シリアの支援者であるソ連も関係を改善しており、解決の可能性は高いと考えられる。また、もう一つの問題としてのPLOとイスラエル内進歩勢力との関係については、パレスチナ革命主体としての立場から現実的に考えた場合、こうした共同は革命の発展にとって、不可欠な要素としてある。しかし、シリアは国家としての立場から、戦略的均衡をつくるによってのみ、シオニストの譲歩を引き出すことができると言えており、まったく必要のないことがある。しかし、これは根本的な矛盾ではない。

これらの要素から考えたとき、関係改善の方向は発展させられるが、同時にその矛盾が拡大する要素をはらんでいると見ることが必要であろう。その矛盾を押しとどめる要は、被占領地の蜂起の主導性にあり、それを、堅持し、発展させるなかに、その解決がある。

## 五 展望

シオニストは、ますます軍事的冒険主義による解決を求めてくるであろう。これに対して、パレスチナ人

力の確立の闘いとしてつくりあげて、蜂起の地平を防衛し発展させうる。また、それがシリアとの戦略同盟を強化するだろう。パレスチナ人民蜂起がパレスチナ人民の自己権力の確立の闘いとしてつくりあげて、蜂起の地平を防衛し発展させうる。また、南部レバノンにおけるシオニストとかいらいSLAに対するパレスチナーレバノンの共同闘争を強め、侵略にそなえたゲリラ戦陣型を強化することが必要である。南部の闘争が勝利的に闘われば闘われるほど、被占領地内の闘争を強化することになる。

タビューリーの抄訳です。エルサレム市で発行されているアル・ファジル紙（「暁」）が、その最後のインタービューを行つたことになります。——編注

問…今回の蜂起のタイミング、強さ、開いた質を打ち固めていくことによつて、蜂起の持久性を強化していくかなればならない。

政治的には、この蜂起の力を背景として、PLOがパレスチナ人民の唯一合法の代表であり、PLOを抜きにした政治解決はないことを示していかなければならぬ。

また、南部レバノンにおけるシオニストとかいらいSLAに対するパレスチナーレバノンの共同闘争を強め、侵略にそなえたゲリラ戦陣型を強化することが必要である。南部の闘争が勝利的に闘われば闘われるほど、被占領地内の闘争を強化することになる。

こうしたこと、そして他の諸事象から、パレスチナ人民は、事態の発展に望みを失い、その結果、蜂起していくことが必要となつたのである。この蜂起は、感情的な反発とか、短期的な怒りの反応とかいうものではない。自由と独立という、何人も奪つた人々も、六七年戦争で、イスラエルの占領支配をうけることになつた。こうして、パレスチナ人は、全員が、イスラエルの占領下にくみこまれ、イスラエルは、他の人民が享受している基本的権利すらも、パレスチナ人に認めなかつた。

問…そのパレスチナ国は、どこに作られますか？

答…解放された地域、または占領者が撤退してしまった地域のどこにでも建国する。我々の建国する国は、あらゆる面で民主主義をとり、あらゆる場所での平和と正義のために力をつくすことに全力でとりくむだろう。この点を我々は一貫して強調してきた。

問…六七年に占領された土地に、そのパレスチナ国を作るという言い方ができますか？

答…我々は、被占領地解放、我々の国（の建国）のために闘い続けていた。我々の他の諸権利については、広範な人民の闘争が続くだろう。解決せねばならない多くの問題があるので。しかし、これらの未解決の諸側面は、適正な構造の中で、かつ合意に達した国際会議で検討されねばならない。

問…パレスチナ・ヨルダン合同代表団の一部としてその国際会議に参加するには、すべての自由な人民のよう



く利子（平均八・七%）を加えた一四億八九〇〇万ドルを、同期間に得ている。つまり、「イスラエル」経済が六九年から八五年の間に西岸、ガザから導き出した総額は、四八億九〇〇〇万ドルになるということである（非合法労働から「節約」した分は、含まれていない）。

この経済搾取に加えて、何千ものパレスチナ人労働者は、非合法であるにもかかわらず、「イスラエル」内で夜をすごさなければならぬ。パレスチナ人労働者は、人間以下の条件の所に住まわされ、「イスラエル」当局によるいやがらせと人種主義的な攻撃の対象とされる。

經濟的從屬

として奉仕させられている。これは「イスラエル」経済を同時的に強化するのを目的としており、パレスチナ国家の物質的基礎となる独立したパレスチナ民族経済を切り崩すことなのである。

西岸のセツラー六万人は、人口比では七%以下を占めているにすぎないが、西岸内総生産の三五%を占める経済活動を行っている。西岸のパレスチナ人の国内総生産は、過去数年間、変わっていない。土地収奪、農業、工業活動への制限に加え、「イスラエル」経済の不況から、パレスチナ人の国内総生産は停滞したままにされている（八三年度のパレスチナ人国内総生産は、推計八億一〇〇〇万ドルとされる）。パレスチナ人の可処分収入は、八四年度で、一三〇〇～一五〇〇ドルで、一人当たり年間収入は、一四五〇～一六五〇ドルということになる。これは、「イスラエル」内での一人当たり年間消費額の三分の一に相当する。

パレスチナ人の国内総生産分布を業種別みると、工業が七%、農業が二七%、建設が一六%、運輸、商業、サービス業が三六%、それに公共事業が一四%である。しかも、ここ数年、農業はさらに低下している

第三表　對西岸、ガザ貿易黒字の推移。

一九六九	一九六八	一九六七	年度
一八・八			ガザ
三九・〇			西岸
五七・八	三八・二	二二・七	計

キャンプ・デービッド合意以降の期間に、黒字の六一%が蓄積されることは、特記に値する。被占領地からの「イスラエル」への輸出のかなりの量は、「イスラエル」の必要にみあう限定した分野の工業のみ許可する政策にそつて生産された商品である。

七年)、セツラーの年間増加は、平均七〇人であった。リクード政権になって(七七年一八四年)、それが五四〇〇人に増加した。この二つの数字の差異について、セツラー増加問題に関する労働党とリクードの政策的相違があるというよう、誤った政治的結論を導くべきではない両ブロックが、連立政権をくんで「イスラエル」を統治した最初の年(八四年)に、一万五〇〇〇人のセツラ一増加があった。八五年一八六年の期間は、年間増加率が低下したが、政策の変化のためではなく、イスラエルの経済困難のためである。

「イスラエル」内のパレスチナ人

西岸には、一四歳以上のパレスチナ人が四三万六〇〇〇人住んでいるうち、一五万四〇〇〇人が勤労者である。この勤労人口の三分の一が「イスラエル」で労働している。ガザでは、一四歳以上の人口は二六万四〇〇〇人、うち勤労人口が八万七二〇〇人で、その半分が「イスラエル」で働いている。この数字についてはパレスチナ人の多くが日雇いだったり、非合法雇用だったりするので、変化する。しかし、推定では、一〇万人のパレスチナ人が四八年被占領地で、労働力を売つている。うち半数は、労働許可を持たずに、非法に働いている。被占領地から「イスラエル」内への労働者の業種別分布は、次のようになる。四八・三%が建設労働、一九・五%がサービス（この中には、そどうじ、皿洗い、家庭の手入れ等、地位の低い職業が含まれる）、一八%が工業、一四・二%が農業である。

第二表、

一 九 七 五	一 九 七 四	一 九 七 三	一 九 七 二	一 九 七 一	一 九 六 九	一 九 六 八	一 九 六 七	一 九 六 六	一 九 六 五
六 三 •	六 六 •	五 九 •	五 〇 •	三 三 •	三 三 •	九 九 •	九 九 •	四 四 •	四 四 •
九 九 •	九 九 •	五 五 •	八 八 •	一 一 •	八 八 •	五 五 •	三 三 •	二 二 •	七 七 •
一 四 四 •	一 四 四 •	一 一 •	七 六 •	七 六 •	五 五 •	三 三 •	一 一 •	四 四 •	七 七 •
四 三 •	三 三 •	三 三 •	三 三 •	三 三 •	三 三 •	三 三 •	一 一 •	四 四 •	七 七 •

② 「イスラエル」の年間節約額。  
被占領地からの労働者数。  
単位：一〇〇〇人

「イスラエル」国家は、パレスチナ人労働者の賃金総額の一五%を貯蓄したが、これは、通常「イスラエル」人労働者に退職金、国民保険のようない利益として還元されるものである。六八年から八五年の期間に、被占領地からの労働者に総額一二億六〇〇〇万ドルの賃金が支払われたので、イスラエル政府が同期間にこの賃金に関して行った貯蓄は、三億五〇〇〇万ドルをこえた。加えてヒュスタードルートは、被占領地からの労働者の源泉徴収、雇用者から国民年金ム、ニミ、ニミラの基金につ

する過重な制限、こうした理由によるものだ。

#### ヘ鉄拳（政策）

壊すことだ。パレスチナ人は、（占領軍当局の）気のむくままに逮捕され、ニセの自白を強要する拷問をうけ、法的手続きをために軍法会議に経験している。シオニスト当局の鉄拳政策の目的は、抵抗をつぶすだけではなく、すべてのパレスチナの民族的表現、行動をしめ出すことにある。

#### ヘ占領税

「イスラエル」の被占領地での歳出は、軍事行政府予算からまかなかれている。八三一八四年度は、一億五〇〇万ドルにのぼり、八四一八五年度は七〇〇万ドルであった。西岸からの直接税は、八三一八四年度予算の五八%をカバーし、八四一八五年度では四四〇〇万ドル、三一八四年度では二三〇〇万ドルであることは、明らかである。数字だけみれば、占領は、「イスラエル」予算に財政負担となっているのは明らかである。しかし、実際は、そうであることは、明瞭である。数字ではない。「イスラエル」は、被占領地でさまざまな税金を徴収しては、直接的に、イスラエル国庫にくみこんでいくからである。

「イスラエル」から西岸、ガザに輸出される農産物に課される一五%の付加価値税から、「イスラエル」は、現在で一億ドルにのぼる収入を上げている。八五年度では、九〇〇〇万ドルであった。西岸、ガザのパ

レステナ人は海外からの輸入品に対し、一二%の関税を支払わねばならないが、この関税収入で、年間八五〇〇万ドルが「イスラエル」にいへる農業輸入に対する三五%の（「イスラエル」国家の）補助金が一億ドルをこえないとした場合、そして、単純計算したとしても、パレスチナ人は、年間一億ドル以上の占領税を支払わなければならないことがわかる（これは、実際、ひかえめな計算である。なぜなら、一つ一つの税は除外してあるからである）。

過去二〇年間シオニスト国家は、西岸、ガザの自然的発展をゆがめたばかりでなく、これらの地域の経済を新たな形態の（対「イスラエル」）依存関係を作ることによって、不公平な基礎の上に「イスラエル」経済だけではなく、これらの地域の経済を新しくして、不平等な経済搾取をパレスチナ人民に対して行ってきた。その結果として、占領下のパレスチナ人の生活水準は、パレスチナの天然資源を強奪しただけではなく、人種差別を基礎とする極端な経済搾取をパレスチナ人民に対して行ってきた。その結果として、パレスチナ人の生活水準は、

一、昨年一二月九日に開始された被占領地のパレスチナ人民蜂起は、アラブ民族解放闘争の新たな地平を切り開いています。

六ヶ月を越える人民蜂起の持久性は、第一に、被占領地の人民自身が蜂起を主導し、在外のパレスチナ革命の指導部がそれを支えることによって、実現されています。これはパレスチナ革命のおかれていた歴史的条件から在外のパレスチナ革命が主導してきました。蜂起は、全面的なシオニストの虐殺や蜂起の長期化による生活の困難にもかかわらず、持久的に闘うことが可能になっています。また、これは人民自身の闘いの主導性を守り、発展させようとする在外のパレスチナ革命の努力によってであります。

第二に、この闘いの持久性は、闘いをたんなる抵抗にとどめず、人民自身の権力としての実体をつくり出しています。蜂起は、全面的なシオニストの占領に対する対決として、政治的、経済的、社会的な全領域においての抵抗として組織されてきました。抵抗の全面的な展開は、蜂起の質を、人民の自己権力確立の闘いとしての性格をつくりあげています。シオニスト商品のボイコット、シオニストのものとの労働の拒否は、それを継続させる自らの基盤の形成を要求し、PLOの蜂起民族統一指導

いて、十分な説明である。また、西岸、ガザに対する歴史的なジオニストの領土拡張の野望に加えて、シオニストが西岸、ガザを保持せんとする深い経済的利益を示すものでもある。この意味から、現在の蜂起の重要性は、結局、占領政策を再考せねばならないところまで占領が高くつくということをシオニスト国家に知らせる方向にむけた巨大な一步であるということである。

#### 資料③ 五・三〇声明 パレスチナ・アラブ人民の切り開いた歴史的な地平を支え、国際主義の実践を進めよう！

去年一二月九日に開始された被占領地のパレスチナ人民蜂起は、アラブ民族解放闘争の新たな地平を切り開いています。

六ヶ月を越える人民蜂起の持久性は、第一に、被占領地の人民自身が蜂起を主導し、在外のパレスチナ革命の指導部がそれを支えることによって、実現されています。これはパレスチナ革命のおかれていた歴史的条件から在外のパレスチナ革命が主導してきました。蜂起は、全面的なシオニストの虐殺や蜂起の長期化による生活の困難にもかかわらず、持久的に闘うことが可能になっています。また、これは人民自身の闘いの主導性を守り、発展させようとする在外のパレスチナ革命の努力によってであります。

第二に、この闘いの持久性は、闘いをたんなる抵抗にとどめず、人民自身の権力としての実体をつくり出しています。蜂起は、全面的なシオニストの占領に対する対決として、政治的、経済的、社会的な全領域においての抵抗として組織されてきました。抵抗の全面的な展開は、蜂起の質を、人民の自己権力確立の闘いとしての性格をつくりあげています。シオニスト商品のボイコット、シオニストのものとの労働の拒否は、それを継続させる自らの基盤の形成を要求し、PLOの蜂起民族統一指導

壞することだ。パレスチナ人は、（占領軍当局の）気のむくままに逮捕され、ニセの自白を強要する拷問をうけ、法的手続きをために軍法会議に経験している。シオニスト当局の鉄拳政策の目的は、抵抗をつぶすだけではなく、すべてのパレスチナの民族的表現、行動をしめ出すことにある。

西岸、ガザにいへる農業輸入に対する三五%の（「イスラエル」国家の）補助金が一億ドルをこえないとした場合、そして、単純計算したとしても、パレスチナ人は、年間一億ドル以上の占領税を支払わなければならないことがわかる（これは、実際、ひかえめな計算である。なぜなら、一つ一つの税は除外してあるからである）。

過去二〇年間シオニスト国家は、西岸、ガザの自然的発展をゆがめたばかりでなく、これらの地域の経済を新しくして、不平等な経済搾取をパレスチナ人民に対して行ってきた。その結果として、パレスチナ人の生活水準は、

この人目解が三体としての P L O の危機に對して、一昨年来、P L O の再統一へむけた努力がなされました。

昨年末にはじまつた人民蜂起は、人民自身の主導によつて、再び人民の解放主体としての P L O の存在を明確にし、また、アラブ反動にパレスチナ人民を無視した解決はないことを示しました。国際的に、ソ米の緊張緩和が社会主义諸国とのニシアチブで進行し、同時に米帝は依然として各国、各革命勢力に對する解体策動を強め、対峙の中心は、再び帝国主義と反帝人民勢力のもとにおかれてことになつています。その流れの一環の中にパレスチナ人民蜂起が位置しています。そして、それは、世界的な二一世紀にむけた再編過程の攻防が人民レベルに反映し、人民自身が選択を問われる段階に至ったことを示しています。

### 三、

パレスチナ人民蜂起の歴史的位置と質を見るとき、このパレスチナ蜂起を断固として支え、連帶する国際主義の実践が、ひとりパレスチナ革命の発展をつくりだすのみならず、人が情勢を主導する流れをつくりだす時代であることを示しています

人民自身を主体とする闘いをつくりあげていくことでもあります。日本人民の闘いもその例外ではなく、それが最も問われる位置にあります。日帝中曾根政権を継承した竹下政権は、日帝の『國際化』—米帝の世界支配を補完する役割の強化—として、世界人民、とりわけ第三世界人民に直接的に敵対しはじめています。こうした現在の転換しつつある国際的な流れの中で、自らの位置を的確にとらえ、日本帝国主義と米帝に対する闘いを強めていくことの重要性はますます高まっています。パレスチナ人民をはじめ世界の闘う人民によって切り開かれつつある流れに呼応し、日本の人民が未来の人民権力を闘い、闘いとする主体となる闘いが問われています。それは、あらゆる分野の人々が結集する闘いをつくりだしていくこうではありませんか。そこそこ、國際主義の実践の闘いの真の発展があります。

日本赤軍戸田

さうに勇戦せらるる意を再び表明します。そして、日帝と米帝の人民抑圧と搾取に対して、ともに闘いぬきましょう。

一九八八年五月三〇日

日本赤軍

タラメである。この作戦に我々の同志はひとりも参加しておらず、ジハム旅団と無関係であることを我々は明確にしなければならない。

第三に、イタリア警察は昨年我が同志二名がローマの作戦に参加していたとデッチ上げ、逮捕状を出した。しかし、これもデタラメの言いがかりであった。今回もイタリア警察は同じ事を我々の同志に行つている。なぜイタリア警察が我々の同志に対して同じ事をしたのか？ 我々が唯一理解できることは、イタリア警察が自分の仕事をやれる能力を持つていないということだ。もし何かが起これば、彼らは我々に罪を着せるだけしか能がない。それは、イタリア警察の無能を隠すてつとり早い方法である。

第四に、我々は最後の勝利まで敵に対する闘いを続ける。我々はいかなる障害をも乗り越えるだろう。

イタリアのデッチ上げ粉碎！

米帝と日帝打倒！

反帝勢力万歳！

1988年6月30日 第35号 目刊 中東レポート

展の前に敵シオニストと米帝は、最  
も困難な状況におかれています。シ  
オニストは、その歴史においてアラ  
ブ諸国との戦争によって領土を拡大  
し、米帝と結託してその軍事的な優  
位性において、はばかることなく、  
その人種主義的、拡張主義的実践を  
行い、パレスチナ・アラブ人民の抑  
圧と搾取を欲しいままにしてしまし  
た。また、パレスチナの民族解放の  
ための武装闘争を『テロ』として宣  
伝し、自らの人種主義的テロリズムの  
正當化を図ってきました。しかし、  
パレスチナ人民蜂起は、この歴史的  
なシオニストの実態を暴露し、同時  
にシオニストが優位を誇る軍事力に  
よる解決を困難にさせてきました。  
さらに蜂起は、シオニストを政治的  
に敗北させただけでなく、経済的、  
社会的危機を促進させています。

米帝は、このシオニストの危機に  
対して、國際世論を無視しても、シ  
オニストが地獄に落ちることから救  
い出す必要がありました。なぜなら  
米帝のアラブ支配の根幹がシオニス  
トの軍事的、政治的な優位性にあり  
きだからです。しかし、シオニスト  
による蜂起解本が困難になればなる  
その存在を利用することによって、  
自らの帝国主義的な権益を確保して

ほど、米帝の中東支配は危機に陥ります。それはユダヤ・ロビーに支配された米国政府が孤立化するにとどまらず、アラブ反動政権と米帝との関係を悪化させ、米帝が恐れるソ連の影響力が高まることを意味しています。

## 二、

歴史的に見ると、この蜂起は、戦後のアラブ民族解放闘争の第四期を意味しています。

第二次大戦の戦後処理に端を発するパレスチナ問題は、戦後処理を拒否するアラブ諸国とそのなかで生まれたユダヤ人国家としてのイスラエルとの戦争として開始されました。この段階においては、ソ連を含む反ファシスト勢力がパレスチナの分割に賛成し、それに反対したアラブ諸国は、新植民地主義に反対する側面と封建的要素を合わせ持っていました。シオニストは、反ファシシズムの一翼として自己の利益を貫徹しました。その後の拡張主義の基盤を形成しました。

以後イスラエルとの対決がアラブ民族主義の柱として、戦前の帝国主義の直接支配に対しての戦い以上の統合力をを持つことになつていました。これから六七年戦争に至る過程は、

反イスラエルを国家間の紛争として処理してきた段階と言えます。そして、六七年戦争でのアラブ諸国との北は、パレスチナ人民の主体的な土解放の闘いを生み出しました。これは、また、アラブ民族内部における資本主義か、社会主義かの再編し流動の時期としてもありました。そして、PLOとして結実したパレスチナ人民の闘いに主導性が置かれ、他のアラブ諸国をその支援者としての位置につかせました。

一ビッド路線と反帝の立場に立つ諸国とその間でゆれるアラブ反動諸国との構造をつくりだしました。

しかし、八二年の P L O のペイルートからの撤退は、国際的にも反帝人民勢力の前進の停滞を生み、人民を主体とする解放の闘いを国家的な規模によって再編する要素を増大させました。これは、国際的には、米帝の軍事的な巻き返しのなかで、反帝勢力を国家として支えていた社会主义諸国と米帝との対峙として全面化し、各国各地域が、親米か、反米かとして明確に問われる時代となっていました。中東においては、米帝の中東和平案や、シリアなどの進歩的国家の動向に左右される時代となり、P L O もまた、国家的な形でのかかわりを中心にして見るえない状況におかれました。

それは、また、パレスチナ革命に反映し、P L O 自身の分裂をつくりだしていました。同時にこうした分裂は、レバノン民族主義勢力との関係などとしても問われてきました。このような状況は、パレスチナ人民主体としての P L O の立場を弱め、アラブ反動諸国が米帝との結託のあとにパレスチナ問題を国家的に解決しようとする傾向を強化させました。

## ハリール・アル・ワジル（アブ・ジハド）同志暗殺に関する弾劾声明

一九八八年四月一七日

我々日本赤軍は、ハリール・アル・ワジル（アブ・ジハド）同志を暗殺したシオニスト・イスラエルとの諜報機関を、パレスチナ革命に対するテロ活動の張本人として強く弾劾する。

被占領地人民蜂起の最高責任者であるアブ・ジハド同志の暗殺は、明確に五ヶ月以上にわたって続いている。人民蜂起を終息させることを狙っていた。シオニストは石と火炎びんしか持たないパレスチナ人民の蜂起によって被占領地の支配力を失いつつある。シオニストはすでに二〇〇人以上のパレスチナ人を殺し、一万二〇〇〇人以上を拘留している。しかし、シオニストは被占領地全体の支配力の回復に失敗している。PLO蜂起民族統一指導部の指導のもと、パレスチナ人は、シオニストの占領政策に対する全面的な抵抗へと蜂起を発展させ、パレスチナ人の人民権力の基礎をつくりだした。それゆえに、シオニストは、被占領地内外のパレスチナ人指導者に対してテロ手段に訴える以外に、占領

四、この侵略でもっとも危険なことは、この侵略の背景に米帝がおり、中東における蜂起によって切り開かれている情勢の力関係をかえるシオニストの大規模な作戦展開が可能となっていることである。今回の侵略はその前兆にすぎない。すなわち、八二年のシオニストの侵略に匹敵する侵略をシオニストが行うこと可能にしている。これは、同時に、この蜂起によって、米帝、シオニストがいかに危機的な状況にあるかを示すものである。

五、我々は、今回のシオニストの侵略の意図を正しくとらえ、パレスチナーレバノン・シリアの統一、また、中東の反帝勢力の団結を防衛し、侵略に対しても備えることを呼びかける。また、被占領地人民の蜂起を支え、それを解体しようとする意図を粉碎していかなければならない。そして、米帝、シオニストに対する闘いを強化することを世界の進歩的、革命的勢力に訴える。蜂起によって切り開かれた新たな情勢はひとりパレスチナにとどまるものではなく、世界的な人民の時代を主導している。この闘いを支え、呼応する闘いを繰り広げ、米帝、シオニストの陰謀を粉碎しよう。

四月一日（月）

● 被占領地パレスチナから、八人がレバノン追放になった。  
ナードバノン内戦の引き金となつたパレスチナ人虐殺事件の十三周年

四月一一日（月）

● チュニスで、アブ・ジハドが暗殺された。  
四月一二日（火）

● 被占領地パレスチナで、統一民族指導部が、指令一三号を出した。

四月一四日（木）

● レバノン南部から、パレスチナ・コマンドが、イスラエル内への作戦。ファタハ革命評議会派（アブ・ニダル派）とされる。三名が戦死。  
四月二四日（木）

● ガルフ戦争で、イラクがファオ半島を奪回した。

四月二六日（火）

● レバノン南部のアル・クープから、DFLPのアブ・ジハド隊がイスラエルへの作戦を行った。イスラエル兵二名を殺し、一名に重傷を負わせた。二名が戦死した。

四月二七日（水）

● PFLPとレバノン共産党のガツサン・カナファーニ隊・ローラ・アボド隊が、アル・クープからキシリティ・ゾーン以北に對し、ゲリラ掃討戦。一五〇〇の部隊を出した。

四月二九日（金）

● イスラエル大使館でのレセプションをボイコット。

四月二三日（土）

● レバノンのトリポリで、車爆弾。

● ソ連外相、ヨルダンへ。

米帝・シオニストの侵略を  
粉砕せよ！  
パレスチナ人民蜂起万歳！  
中東の反帝勢力の団結万歳！

激動の中東  
ドキュメント

四月一六日（土）

- チュニスで、アブ・ジハドが暗殺された。
- 被占領地パレスチナでは、暗殺弾劾のデモ隊が、イスラエル軍と衝突。二〇人が射殺された。
- ガルフ戦争で、イラクがファオ半島を奪回した。
- ミーイラン海戦。イラン側は、オイル・リグ艦艇を攻撃された。

四月二二日（金）

- ダマスカスのヤルムーク・キャンプで、アブ・ジハドの葬儀があった。
- アルジェで、クウェート航空機乗つとり、終了（史上最長の、乗つとり）。
- レバノン南部から、パレスチナ・コマンドが、イスラエル内への作戦。ファタハ革命評議会派（アブ・ニダル派）とされる。三名が戦死。
- ユダヤ暦での、イスラエル「独立」四十周年記念日。多くの国々が、イスラエル大使館でのレセプションをボイコット。
- イラク外相、ダマスカス訪問。
- PFLPとレバノン共産党のガツサン・カナファーニ隊・ローラ・アボド隊が、アル・クープから対イスラエル作戦をしきようとして、イスラエル軍と交戦。二名が戦死した。

四月二三日（土）

● 統一民族指導部の指令一五号が出た。

五月一日（日）メーデー

● イスラエル内のマーティ集会、デモで、パレスチナ人町村（ナザレなど）は、イスラエル旗が一つも

地における、拡張主義と人種主義を続ける方法がなくなつたのである。シオニストは、シオニストとそれを系統的に殺すだけでなく、被占領地外のパレスチナ人民を殺し、パレスチナ人の施設を攻撃した。たとえば、二月に、被占領地の指導を担う三人のパレスチナ人幹部が、キプロスのリマソールで車爆弾で虐殺され、「帰還の船」は、船主と船長へのテロ恫喝で中止された。最終的に、船は、シオニストの爆弾攻撃をうけた。

アブ・ジハドの暗殺は、いかにシオニストが危機的状態にあるかを暴露した。そして、シオニストは、蜂起を終息させるという彼らの期待通りにアブ・ジハド同志を暗殺した。

シオニストと米帝に死を！

パレスチナ人民の蜂起万歳！

パレスチナ人民の殉教者に榮えあれ！

地獄へ落ちつたるのは明白すぎる地獄へ落ちつたのは明白すぎるほど明白である。

我々日本赤軍は、シオニストとその戦略的支援者米帝に対する闘いを強化し、パレスチナ人民への戦闘的連帯を強化する。同時に、世界の進歩勢力および革命勢力に、シオニストと米帝に対する闘いを強化し、敵対して、反帝戦線として統一する対して、反帝戦線として統一することを訴える。我々は、日帝がシオニストを助けるのを決して容赦しないであろう。

シオニストの侵略を糾弾する  
一九八八年五月二日

一、我々は、シオニスト・イスラエルのレバノン侵略を糾弾する。敵シオニストは、五月二日からセキュリティ・ゾーン外ヘレジスタンス掃討作戦を行った。これは、レバノン南部の被占領からシオニスト軍との傭兵「SLA」を追い出そうとするレバノン人民の闘いに敵対するものである。そして、被占領地パレスチナ蜂起を有利にすることになつたし、シオニストがこの暗殺によって、シオニストと米帝に死を！

二、敵シオニストは、六ヶ月に及ぶとされる被占領地パレスチナ人民の蜂起を解体すべく、内外におけるテロによって、運動の解体を図ろうとした。それは、パレスチナ蜂起に対する被占領地人民の怒りは、蜂起の激化を作り出している。今回の侵略は、こうしたアブ・ジハド暗殺での失敗をレバノン南部に侵略を行うことによって、挽回することを終わり、逆に、PLOとシリアの和解を作り出した。それは、パレスチナ蜂起を有利にすることになつたし、暗殺に対する被占領地人民の怒りは、蜂起の激化を作り出している。今回の侵略は、こうしたアブ・ジハド暗殺での失敗をレバノン南部に侵略を行うことによって、挽回することを終つたものである。

三、その狙いの第一は、シリアとPLOの統一を破壊することである。第二に、統一によって、強化された領内への武装闘争を阻止することである。第三に、パレスチナーレバノン人民の共同を破壊することである。第四に、蜂起の人民に對してシオニストの力を示すことであった。

出なかつた。

### 五月二日（月）

- ・イスラエル軍（二五〇〇人程度）、機甲化部隊を「セキュリティ・ゾーン」外へ侵略させ、パレスチナボッラー拠点とされる西ベカ一のメイドゥン村への攻撃に移つた。

二日間で、同村の家屋全部を破壊しつづく。この戦闘で、イスラエル側は三名の将兵を失い、二〇人が以上が負傷した。ヒズボッラー側は四〇人以上が戦死した。同村北部一〇キロのマシュガラ村に配備されシリア軍、戦闘態勢に入つたが、交戦には到らなかつた。

### 五月四月（水）

- ・仏人入質三人、ペイルートで釈放され、パリへ。

### 五月五日（木）

- ・被占領地パレスチナで、ゼネスト。ペイルート南郊で、アマル対ヒズボッラーの戦闘がスタート。現在も続いている（一〇日現在）。
- ・イスラエルは、東エルサレムの商店に、三日間の閉店令を出した（初めて）。

### 五月六日（金）

- ・ペイルートのサブラ・キャンプで、アブ・ムサ派とアラファト派が戦めて）。

闘し、アブ・ムサ派が追い出され

### 五月七日（土）

- ・PLO執行委員会代表が、アンマドゥンへもどつた。

ン、カイロへ行き、シリアとの和解について説明。

- ・ヒズボッラーの二五〇名が、メイドゥンへもどつた。

中東レポートの刊行は、この号から四年目にはいる。中近東の複雑な動向を分析し、洞察した戦場からの報告である。

☆

### 編 集 後 記

当地ではラマダンが五月一七日

族民主革命の直接の敵となつた。

に終わり、断食明けのアイダがはじまる。ペイルート南郊外では、シーア派同士であるアマルとヒズボッラーの衝突で一八〇人以上の死者が出ている。モスラムの年間最大の祝日を前に和平を取り戻してほしい。そして、パレスチナ人民とともに、その力をシオニストに向けていくべきである。

安倍自民党幹事長が党外交と称して、チェコとハンガリーを回ったそうである。反テロとソウル・オリンピックの成功で合意したこと。反「テロ」での中心的役割を果たそうとしている。「国際化」の危険な動きの一つである。

当地は、夏は真夏の暑さになつてゐる。当地ではシオニストの大侵略が予測される。この暑さが八年の時と同じにならないように、闘いの準備をしている。持ち場は

に合意したというニュースがあつた。米帝はこれをフィリピンへの侵略を粉碎するために闘おう。日帝はこれによって、フィリピン民

“それぞれの持ち場において”国際主義の実践を発展させる決意を5・30声明は表明している。

☆

泉水博戦士の拘留理由開示法廷は、発言することもなく、あくまでも静かな姿だった。

先号に統一司令部の指令の紹介があつたが、統報を期待したい。  
(TOKYO後記)